

日本語と日本の方言

—日本語とポルトガル語との対照研究のために—

サンパウロ大学客員教授 國學院大學日本文化研究所教授 久野マリ子
(国語学 方言学)

今日、お話する内容は次の通りです。

1 日本語と方言の研究、2 日本語と日本文化の関係について、3 言葉の意味の記述について、4 対照研究の必要性（ポルトガル語と日本語の対照研究の必要性とおもしろさ） 5 意味記述を行う際の母語干渉のいろいろ、6. 対照研究のテーマ

1 日本語と方言について

日本語の中で話されている言葉がすべて方言であるということは、今年の3月にサンパウロ大学で開かれた全伯大学日本語教師研修会の講演で述べたことがあります。つまり 日本語の地域的な変容を方言として考えるので、珍しい単語や発音の訛りだけでなく 日本語の実態はすべて方言であるということになります。

東京では東京方言、大阪では大阪方言、九州へ行けば熊本方言、宮崎方言、北海道では北海道方言というものが話されているわけです。

1 1 方言研究の意義と未来。

ここで日本語の方言研究のあらましを話しておきましょう。

方言研究の研究対象は、音韻 アクセント 文法 語彙の分野に分けられます。これらの分野を 通時的として研究する方言国語史や言語地理学的研究、共時態として研究する記述的研究、社会言語学的研究など、現在の日本語を材料とするあらゆるテーマが取り上げられています。

特にアクセントの研究は、ほとんどの日本中のアクセントの実態が明らかにされ、これをもとに日本方言の方言区画が描かれています。さらに、歴史的にも平安時代ほぼ1000年くらい前の京都のアクセントが明らかにされています。方言研究の面で比較言語学の手法を導入して、成果を収めた分野です。

従来の方言研究の研究対象は、日本語の地域的な変容を扱ってきました。しかし、今日では、年代差 社会階層差 性別 職業差などについて現代日本語で起こっている現象は、あらゆる角度から方言研究の対象として考えられています。女性語が無くなっているとか、させていただくなどの敬語の体系の変化、この他、タベレル ミレルなどの一段動詞の五段動詞化はもちろん、ガ行鼻濁音が無くなる現象やサ行子音の口蓋化の程度が弱まる現象などの共通語化と日本語の新しい変化についての研究など 実にさまざまな問題が取り上げられています。

このような研究は、日本語の歴史を考える上での資料も提供します。文字の研究としては、方言で生まれた漢字の研究もあります。

方言研究の研究のおもしろさと意義は、言語を通して社会の変化を見ることができることです。今ここで述べた研究の大半は今の日本語について豊富な資料を得ることができるからこそ、研究ができるわけです。

例えば、私共はチームで（岐阜教育大学の久野真、福岡教育大学の杉村孝夫、岩手大学の久野真男と私の四名）四つ仮名の研究をして参りました。四つ仮名とはサ行のシとスの濁点のついた仮名とタ行のチとツに濁点のついた仮名の発音と仮名の使い分けのことを言います。この発音の言い分けは、江戸時代の初め頃までは標準的な日本語にあったのですが、それ以後は失われました。現在、日本の方言にこの発音の区別を未だに保っている方言があります。それは、高知県と鹿児島県なのですが、この地域でも20代の若者にはすでにこの区別はありません。

私共は、この方言の四つ仮名の発音の特徴的な音声を往來のアナログ録音ではなくデジタルオーディオテープレコーダーで録音しました。いまから300年以上前に消えた日本語の音声を聞くことはできませんが、この録音により、日本語研究者に四つ仮名の音声を提供することができます。

また、高知県内で200名近くの70歳代から10代の後半までの方言の話し手から四つ仮名の音声と仮名遣いの意識を聞いたことにより、単語のどの位置に四つ仮名があるかによって四つ仮名の失われる傾向が異なることが明らかになりましたから、そのような傾向が明らかになるような音環境の単語を 漢語 和語 外来語の種類の中から選びました。外来語の四つ仮名についても調査しました。

このような研究はもう 発音をしてくれる話者が得られなければならないことです。さらに、典型的な発音のできる方の上顎の型を取ってそれに62の電極をつけたものを使って舌が上顎のどの様につくかどうかということ、エレクトロパラトグラフによって測定しました。このような数量調査や実験音声学的な研究や測定も、現実に生きている方言の話し手がいなければ不可能な研究です。

方言研究はこのように言葉の変化の様相や要因を探る研究として 古典を使った研究よりも具体例が豊富にあるところに研究の特徴があると言えます。どんなに優れたテキストでも、文字で書かれたとたんに、作者のフィルターがかかります。文字のテキストは、パロールとしての言語の中の偶然の事象を排除しますが、個人差をも捨象してしまいます。しかも、その個人差はもしかしたら言語変化の兆しを示す大きな手がかりかもしれないわけです。

ただ、方言を研究対象とする時に注意しなければならないのは、方言研究の材料は無尽蔵と言ってもいいほどありますので、なにを資料と観てどの様に研究するかを見極める必要があります。また、資料の質ということが研究の決め手になるので均質な資料の収集ということが、研究の成果の出来不出来の鍵となります。それから、自分が何のために研究をし、何を明らかにして世の中の何に寄与したいかということを決めてかからなければなりません。いわば、方言に立ち向かう姿勢そのもの、言語観のあり方が問われることとなります。

最近の方言研究では言語の変化についての研究が増えています。

この言語変化というものについて柴田武氏は、こう言っています

言語変化は、ことにその言語変化発生時には、たかが一つの音の変化にしても言葉の意味と関係しているのである。言語変化は決して気まぐれなものではない。また、言葉がそれ自身で一人歩きするものでもない。言語は自然に変わるものではなく人間が介在して変えるものである。(柴田武『日本語はおもしろい』岩波新書1995年)

このような視点から、現代日本語に起こっている言語変化について、どのような原因で変化するか、どこから、どのような条件で、いつ頃、誰から、(変化の速度、傾向) これらからその原因を探ろうとする研究が増えています。

2. ことばと文化の関係について

それでは、今回の講演のテーマ日本文化の諸相に合わせて ことばと文化について 日本語と日本の方言を材料にして考えてみましょう。

日本語の方言研究は、日本文化そのものを研究のテーマとするわけではありません。しかし文化を「子から孫へ孫から曾孫へと個人の選択の自由はなく 無自覚的に伝えられる社会的習慣」というふうに考えれば、言葉は文化ということができるでしょう。この観点から見れば、言葉はまさに文化そのものであるといえます。

社会習慣としての言葉について 日本人と日本語、あるいは、日本人の心理構造と日本語について考えてみましょう。以下 やや古典的な考え方をもとに述べます。

日本文化を知るための単語、キーワードがあるといわれています。例えば、「なつかしい」「やるせない」「しつこい」「さぞかし」「なじみ」や「義理」「人情」「恩」などが有名です。ついでに琉球方言の例から言うと、「そっと」もこの中にはいるかもしれません。

①窓をそっとしめる。②気が立っているからそっとしておく。③赤ちゃんをそっと抱く。④目立たないようにそっと立ち去る。

このような言い方が琉球方言にはないのです。おそらく、英語でもそれぞれの文を別の語で言い表し、これを一語で言うことはできないと思います。

例をもう一つ。ポルトガル語で「サンパウロの犬は、大型の犬がおとなしい」の説明をしようとして苦労しました。「おとなしい」の意味内容は、「むやみに吠えない、主人の言うことをよく聞いて従順である。散歩の最中にも急に駆け出したりはしない、他の人に飛びつかないし、匂いを嗅ぎに寄っていかない。私が頭を撫でてもしやがらない。」などなのですが、このような意味内容をポルトガル語で一語で言い表す単語を私の語彙力ではとうていみつかることはできません。

しかも、ポルトガル語では、「犬がよくしつけられている」と飼主の人間側の行為としての評価として表現するかもしれませんが。日本語の「おとなしい」というのは、犬の持っている能力や資質に対する評価という表現ですから、日本とブラジルとの発想の差を表しているかもしれません。

これらの単語がドイツ語や英語に翻訳しにくいということは、いったいどういうことなのでしょう。

人にはそれぞれ、意識、行動の傾向があり、「生き方」の型がある。それは、一人の個人のレベルだけでなく、人の集団、社会集団にもそれがあると考えられています。つまり、「各社会に特有の生活 思惟活動の諸様式」があって、社会集団のメンバーに共通した「心理構造」があるとされている。このような特有の生活様式やものの考え方というものは、まさに社会集団全体に共通する「生き方」であり 集団のココロともいうべきものであるということです。

このような、一定の共通の心理構造を分有し、同一の文化を担っている人間の集団を「文化共同体」と呼ぶなら、その最も基本的な単位として考えられるのは民族、あるいは国である。「特有の生活、ものの考え方の諸様式」を最も強固にめだちやすい形で担っている集団単位が民族だと言っても良い。それはしばしば一つの「言語社会」を形成する単位集団と一致する場合があるというわけです。

確かに、日本などではこのように言うことができるが、ブラジルの場合では国の成り立ちからいって この言い方は当てはまらないと思います。移民が終わり、今後新しいブラジル人としての共通の認識が形成されていくことは考えられるでしょう。

このような文化共同体に共通する心理構造を捉えるには、その共同体の

使用言語が有力な手がかりとなります。従来、文化人類学者達は早くから、特に単語は文化の索引であるというテーゼを立ててきました。個別言語の構造の中で「単語」（および慣用句）は、それを使用する集団の心理構造を知る手がかりになりやすいという認識がこれです。

はじめに挙げた、「なつかしい」「さぞかし」「義理」「人情」の類は日本人という集団を対象とした際、日本文化の索引になりうる有力な例だというわけである。つまり日本人のものの考え方や心理構造 特に無意識に根を下ろしている価値の体系を知る「指標語」が、日本語のシステムにちりばめられていて その代表例になりうるものの一つが「なつかしい」「さぞかし」「義理」「人情」の類の語であると言い換えても良いというわけです。

しかし、実際のところ、日本語を母語とする人なら誰でも、このような単語を説明したり 翻訳したりすることは簡単かという、それがそうはいかないのです。

2 2 特有語と欠落語について

文化共同体の共通のもの（心理構造）を知る索引としての単語が、その使用言語の構造の中に、主としてキーワードの形で存在すると考えられています。但し、そのキーワードは、それがよく使用されるからキーワードであるという積極的な面からのみ捉えられるのでは正しいとは言えません。ある時は、よその社会では存在するが、別の社会ではそれに対応する言葉が存在しないと言う面にも注目しなければなりません。

これを方言学では、特有語 欠落語と呼んでいます。

例えば、日本語では、同じ親から生まれた子供をキョウダイといいます。英語のように男キョウダイbrother、女キョウダイsisterを別の単語で言うことは一般にはしません。シマイ（姉妹）という語はあるのですが、一般の話言葉としては、会話の中にはあまり使われません。いっぽう 兄弟の中で男キョウダイを年上と年下とで言い分ける単語はアニ、オトート、女キョウダイではアネ、イモートという語が使われます。ハラカラという語が日本語の古い言い方なのですが、現代語では使われることは希です。

男と女のキョウダイを年によって言い分ける言い方は、英語にはありません。このように、ある言語の対して単語がない場合 これらを欠落語というわけです。

一方 「なつかしい」「さぞかし」「義理」「人情」の類はドイツ語や英語と比べて日本語の特有語ということになるでしょう。

ここで注意しておきたいのは、意味研究の立場からは、単語ではない場合、つまり一語で言い表さなくても慣用的な決まった表現があれば、意味の単位として考えるということです。単語か単語でないかは文法の問題であって、意味研究からは集団で固定的な言い方があるなら、それは単語である必要はないと考えたいと思います。いずれにしても、このようにある言い方 単語が存在しないという事実が、その言語社会の文化内容の裏からの索引になっている例と考えられます。

このような欠落語と特有語の存在は、意味領域 語彙体系全体の検討比較という課題にも発展する問題です。

なお、いままで「各社会に特有」の心理構造を強調してきましたが、「特有」の程度については項目ごとに検討する必要があるでしょう。比較文化論 対照言語学などの諸分野の中の問題の一つとして 項目の検討は今後の課題です。

少なくとも日本では、未だに、一般にかなりの研究者までが、日本という国が、風土 歴史その他の点で「多くの国々と際だった特質をもっている」という考えを持っている点を指摘しておきたいと思います。

これは、各言語集団の特色を記述する立場としては、問題のある考え方であろうと思われます。何故ならば、どの国の文化にも固有のものがありそれぞれの国は際だった特色を持っているわけで、特に日本が際だっていると言えるほど研究は進んではないからです。どの文化にとっても特色の程度に差はないのではないのでしょうか。以前は、特色を際だたせる研究が多かったのですが、最近では、価値を際だたせないという考え方も増えてきています。

このような文化の索引としての単語や表現を見つけるにも、言葉の意味が追究されなければなりません。

3 言葉の意味の記述について

言語変化について 柴田氏の発言の引用すれば、言葉の変化には必ず意味が関係しています。そこには、必ず人間が介在しています。これからは、語彙の体系記述、意味の記述について考えてみましょう。

意味を記述するとき 注意しなければならないのは、自分の持つ方言の意味のカテゴリーに影響を受けることを率直に認めなければならないことです。

人はものの名前を覚えるときに自分の体験から単語を覚えるわけですが、その体験は自分の所属する社会集団の共通の体験である可能性があります。このため、ものの見方 発想法、表現法にそれぞれの研究者の方言のカテゴリーが現れるわけです。

自分の持つ意味の枠組みが無意識に生活の中で現れる例としては、次のようなものがあげられます。

人は言葉の意味を経験と何らかの連関のもとに覚えています。

また、これは言葉の持つ優れた特性の一つでもあるのですが、人は自分に都合の良いことだけを見たり 聞いたりしているということです。つまり 社会的な思いこみのもとに、さまざまな現象を解釈しています。

3. 1 例えば日本人は目の色、髪の色については、ほとんど表現することばがありません。実際に見ていてもその人の目の色が何色というべきなのか、言うべき言葉が見つからないのです。ギリシアのアテネ大学の先生に「あなたの髪の色は何色ですか」と聞いたことがあります。実際には見えているのに、何色と表現すべきなのか言葉がないのです。戸惑いながらも、彼は薄い褐色とか栗色とか言うことを教えてくれました。日本人にとっては目はクロ 髪はクロなのです。実際に目の色が何色であるかは問題ではありません。白人はすべて「アオイ目」と表現されるように類型化しています。

古典的に有名な例として 太陽の色が何色かということもあります。日本では赤で 幼稚園の園児は太陽の色はみんな赤く塗ります。ブラジルではペルーやヨーロッパと同じ黄色です。虹の色が何色かという例も有名です

3. 2. 私の大学院の時の先生で、W. A. グロータース神父から伺った例も古典的な例の一つでしょう。グロータース先生は、ベルギー人で言語地理学の研究として優れた業績を持って居られますが、日本での生活は長く日本に来る前は中国に居られたので漢字の知識は私共日本人以上のものがあります。ヨーロッパ系の言語の訛りはあるものの、神父として日本で長く生活しておられて日本語は達者なのですが、日本を方言調査で回ったとき「すみませんが」と日本語で何かを聞こうとするとたいいていの日本人は、アイ キャン ノット スピーク イングリッシュと手を振りながら逃げだしたそうです。白人を見れば誰でもアメリカ人だと思ふとか、どんな色の目をしていても青い色の目で、金髪だと言われるのと同じで、日本語で話かけても相手はガイジンだから英語を話していると思ひこむわけです。

先日のドナルド キーン先生のお話の中にも日本の文学の中で人の顔の描写が少ないことを話しておられましたが、目の色、髪の色については今でも表現できる色の種類が少ないようです。

人はさまざまな物に言葉を与えることによって外界にある世界を理解しています。その切り取り方はそれぞれの社会によって決まっていてその社会的な存在の一員として言葉と物の関係を覚えているのです

3 3. 例えば、日本語で「肩がこる」という言い方があります。日本へ来たヨーロッパ人の留学生は、肩が凝るという日本語の表現を知らなかったそうです。それで彼は日本に来た当初は肩は凝りませんでした。一端「肩が凝る」という表現を覚えたとたんに肩が凝るようになったそうです。これは、ある現象に言葉という形式を与えることによって、その現象が自覚的に表現できるようになることを表す例です。この学生は、身体的な状況として肩が凝るという現象がなかったわけではないわけです。ところがそれをぴったりと言い表す形式がなかった、そこへ「カタガ コル」という日本語の表現が見つかり それ以後、肩こりの現象を訴えることができるようになったわけです。

また、単語を覚えるとき その社会規範や価値も一緒に覚えています。

それはあまり、日常生活ではあらわにはなりません、時々見えることがあって 発見した人に戸惑いや驚きを与えます。

例えばまた、ドナルド キーン先生のお話になりますが、日本人は何故活字でなく写本や木版本を選択したかという問題がありました。今でも、日本の社会では手書きの物が一番心がこもっていて 丁寧だという印象があります。字を書く道具でも鉛筆よりはボールペン ボールペンよりはインク インクよりは墨の方が丁寧だと思われるようです。私共の研究者仲間でも字が下手な人ほど早くワープロ パソコンを使うようになりましたが、これも手書きに対する思い入れの現れと言えるでしょう。

3 4. また、例えば、言語によらない伝達、ノンバーバルコミュニケーションを研究しているアメリカの研究者のマージョリー バーガソンは次のような例を報告しています。

ある大学での実験。

まず その州内にある多くの企業の就職の面接の担当者に、2通の履歴書を送ります。

その2通の履歴書の内容は、ある1点を除いて全く同じ内容です。その違いは、一方の男子学生は身長が180cm、もう一方の男子学生は168cmというだけです。その結果、168cmの方に面接を申し込んだのは1社だけだったといえます。

誰も、身長の違いという見かけがその人の能力に関係があるとは自覚的には思っていないでしょうが、アメリカ社会には180cm以上の男性は頭もいいしリーダーシップもあるという思いこみがあることをあきらかにする例でしょう。イギリスやアメリカの推理小説などで、主人公が大きいとか、あの小男がという記述がよく目にしますが、その社会での身長に対する一般的な価値などがわかれば、もっと小説を楽しむことができるのではないかと思います。

3 5 金持ちという語は日本語にもポルトガル語ricoにもあります。言い方は違いますが概念は似ていると思われます。ところが、豊かさの持つ意味内容に差があるようです。

よく「日本人は金持ちだ」と思われています。ところが、私がサンパウロに住んで6ヶ月の間に感じたことは、サンパウロには金持ちが多いということです。これは、日本での金持ちというものの意味内容とブラジルでの意味の内容がずれているせいでしょう。

ブラジルと日本の金持ち違いを比較してみましょう。

私の考えでは、どんなに広い所に住んでいるかとかメイドなどの使用人がいるかとかが判断の基準になります。門番 運転手 庭師 料理人 メイドなどの使用人を抱えている家はとても金持ちだと思います。これは人件費の価格が違うからなのですが。

つぎに、一戸建てに住んでいる人が多いのですが、東京では特に一戸建てに住むのはとても難しいのです。また、家の広さや天井の高さが違います。さらに別荘を持っている人は金持ちです。

休暇が何日取れるかも一つの基準になりそうです。旅行に何日行けるかもそうです。日本のような忙しい旅行日程からすれば、ブラジルの旅行はとても贅沢で金持ちだと思います。

一方、ブラジルでは何を持っているかが大きな要素のようです。

特に、電化製品を持っているかどうかで、電子レンジ、全自動洗濯機、乾燥機、クーラー、大型のテレビ ビデオ、ビデオカメラ ミニコンポから電子手帳、レーザーディスク、携帯電話、車まで。しかも、ホンダ マツダ トヨタ ミツビシのような会社製の車は、ブラジルではガイシャですが、日本では大衆車も発売していますので それ程、有り難がられはしません。アシックスのスニーカー、コンピュータなどは、特に金持ちでなくても日本では持っている人は多いのです。

4. 対照研究の必要性

私は日本語の方言を材料としてさまざまな現象を記述してきました。この方法で別の言語と日本語との意味とか語彙の体系の対照研究に興味をもっています。実際に今まで中国語と日本語、モンゴル語と日本語について 名詞と動詞の意味について対照研究を試みました。このような研究は対照する言語の文化の差を明らかにすることができます。

さまざまな面からの、対照研究の目的と必要性について考えてみましょう。

対照言語学と比較言語学とは言語学の分野では異なる研究を意味します。比較言語学は比べる二つの言語の系統が歴史的に関係が証明された言語でなければなりません。

これに対して 対照言語学は比べる言語の関係は関係なく 二つまたはそれ以上の言語の性質を比べる分野です。この研究からは、異なる言語を比べることによって それらの言語の特徴がより明らかになります。言語の違いがよくわかり 効率よく教授できるとかがその結果として現れるので、今までは、主として、日本語研究の分野で研究が進められてきました。

対照研究に必要なことは自分の母語の他に言語を知っているということです。この点では、たしかに、留学生は日本語をマスターする過程で常に対照研究的な方法を使っていますから、この研究に向いていると思います。しかし、自分の言語を客観的に見つめる科学的な方法論と知識がなければ、この研究を進めることはできません。対照研究を進めるのに必要なことは、自分の母語のことをよく知っていることです。比べるための物差しの基準がはっきりしていなければ、比べてもてもその結果が確実なものとは言えません。また、この研究には言語研究の研究対象としてそれ自身言語類型学のように、ダイナミックな研究にも道は開かれています。

ただ、対照研究は一般的に他の研究分野のように研究そのものには、自己完結性がなく他の言語研究に比べて ～のための研究という側面を持つのが特色で、それゆえに価値が低いように言われることがあります。

受け身構文の解明とか、日本語史とか、文学のようにそれだけで完結する研究だけが、研究として価値があるというような考えがあるのは事実ですが、研究というものは、何であれ「～のために」ということがあるわけです。ただ自分の興味だけで研究をすることもあり、それはそれで意味のあることですが、だからと言って 研究の成果が世の中に役に立つことを否定するものではありません。特に人文系の研究では研究成果が直接社会に貢献することが少ないので、その研究の成果が世の中の役に立つならば、むしろ研究者にとって喜びとするところでしょう。

さて ことば（方言）の研究は、その国の文化を研究することに繋がることは初めに述べました。次に大切なことは、基準となるべき自分の言葉を再考し、客観的に観察して考えることです。自分の話している言葉がどのような特色を持っているか、そのためにはそれがある比較の基準となる言葉と何処が違うかを明らかにしなければならないわけです

そして誰もが自分の方言の持つ枠組みに引きずられるということも自覚していなければなりません。いろいろな研究で 調査の対象としてよく小説が選ばれますが、小説家の出身地の用法が現れていることがあるので注意が必要です。

一般に言葉のこのような細かい使い分けについて、辞書の記述は不十分であることが多いという指摘があります。それはその通りなのですが、ちょっと辞書の側から弁護しますと 辞書というものが何のために作られたかによって辞書の記述は決められるべきところがあります。従来の国語辞典は日本語ができる日本人ために作られたものが多いのです。それもどんな時に辞書を使うかといえば、ちょっと難しい漢字の読み方や書き方を知るために使うという使われ方が多かったのです。そのような辞書に細かい意味の使い分けや、類義語との用法の違いを求めるのもスジが違うという気がします。もちろん、辞書の記述は類義語や意味の記述に中心が置かれるべきだという考えを支持していますし、私共の方言辞典もその方針で編集いたしました。

このところ、意味の研究、特に用言の類義語の研究が進み、それに重点を置いた辞書も刊行されてきています。日本語を母語としない学習者が増えた今 特にそのような学習者の立場にたった辞書が必要とされていることはあきらかです。

そのためにも、語彙体系や意味の対照研究が盛んになることが必要であると思います。個人的な希望としては、せめて 「日本語では、車が走るとは言うがクルマガ アルクとは言わない」という程度の説明が欲しいと思います。辞書の規模としては、新明解国語辞典か、できればアウレリオくらいの規模と説明のある葡和 和葡辞典が欲しいと思います

5. 意味記述を行う際の母語干渉のいろいろ

対照研究を行う際、自分の母語 母方言の干渉が起こります。干渉とは対照研究の際に使われる述語で、基礎的な言葉の上に新しい言葉が被さったとき 前の言葉の特徴が新しい言葉の上に現れることを指します。

5. 1 語彙

これは語形と意味の面から考えなければなりません。それは、言葉が語形という音声の連続する形式と意味とから成り立っているからです。

例えば私は、スネという語が、語形が共通語と同じであったため、意味が共通語と異なることに気づかず 方言とは気が付きませんでした。

スネは、膝から足首までの部分を指しますが、私の方言では、膝頭のことです。短いスカートを穿いているとスネが 寒いというわけです。この部分は、各方言で場所がはっきりしないことが多く 琉球方言では足の付け根から足先までの意味ですし、最近の日本の若者はどこを指すか知らない人も多いと聞きます。滋賀県くねが畑方言の例では、老人でも、「親の臍をかじる」というからお金か、あるいは懐のことではないかと言っていました。

ご飯をお茶碗に入れることをツグというのも方言だと指摘されるまで気づかなかったのですが、これは皆さんの中にもいらっしゃるのではないのでしょうか。

日本語をポルトガル語に直訳する言葉や 言葉だけでなく文化を直訳することが起こることがあります。

例えば、センはポルトガル語では100の意味です。これが日本語の1000に音声が似ています。日本語が達者な日系人が日本に留学したときの話です。

お寺の屋根の瓦を寄進することにして、支払いをするときに1リアルだと思ったそうです。しかし、お寺からは10リアル分の代金を請求されました。その学生は家に帰って「日本人でも嘘を付いて お金を騙しますよ。」といったそうです。その後、すぐに勘違いに気が付いて大笑いをしたということです。この話をカンピーナス大学の高須フミ子先生から伺いました。

5. 2. 音声。

私の発音は、rとlの区別という以前に、子音の破裂が弱いという日本語の方言の特徴を持っています。その特徴が、ポルトガル語の発音にも現れます。呼気が弱いため、brは、しばしばprと聞き分けられなくなります。また、v fの発音も摩擦性が不十分です。

岐阜教育大学の久野眞氏の観察によれば、サンパウロの日系人の日本語に見られる音声的特徴として、母語のポルトガル語の干渉が観られます。

まず、「全然」の発音の前の母音の鼻母音化と「ゼ」が破擦音でなく摩擦音である点。「先生」のセの鼻母音化など。また、長音 促音、の長さが充分ではありません。「私の家にキッテ下さい」というメッセージを貰ったことがあります。

5. 3. 文法

アスペクト。自分の方言の例

進行態と完了態、将然態の区別を持つ方言の話し手であるため、雨が降っているを完了態の意味ではいわないことを知らなかった。

私の方言では、朝起きて外を見たとき地面が塗れていれば、今は降ってなくても雨が降ったことが分かる。その時に、アメ フットーという。

フットーは、降るの連用形 + 「て」 + 「居る」という語構成で、これを共通語に直訳すればアメガ フッテイルになる。

5. 4. 言語行動

説明に使う言葉の意味がずれていることがあります。これにより思わぬ所で文化摩擦を生じることがあります。

あやまりと挨拶について

いつ謝るか、どの程度謝るかは、方言や国によって違うようです。日本人は簡単に謝ってしまうけれど ブラジルではなかなか謝らないと聞いています。

しかし、日本語の中でも琉球方言では、軽くすみませんという言い方がありません。約束の時間に遅れたとき ジカンマケ（時間負け）とかアー

マチガイ（嗚呼、間違い）とか言います。借りた物を無くしてしまったときも、アーマチガイといって スミマセンとは言いません。ちょっと足を踏んだときも、「あんたの足ねー」とか、「踏んだねー」というのが丁寧な表現の方だと言います。

朝の挨拶も違います。「暑いですね、寒いですね、雨が続きますね、今日はいいお天気ですねー」とは言わないのです。「海へ行くのですか、今あなたは歩いていますね」のように言います。しかし、必ず相手の行動を言語化して言わなければ、礼儀に外れているとして非難されます。インドネシアでは、「今日は赤い服を着ていますね」などと相手の服装について言うことが挨拶の変わりだそうです。この様なことはポルトガル語の中でもあるだろうと思われま

6. この他の対照研究のテーマについて

以上に挙げた自分の母語の干渉の例は、すべて対照研究の対象になると考えられます。対象とする言語によって意味の記述とあり方が違いますが、ここに対照研究のおもしろさがあります。

6 1 命名法や発想法について

命名の仕方や発想法に、各方言の特色がでることがあります。そして全くの偶然から、全然別の離れた地域で同じ発想を持つことがあります。例えば、流れ星を、琉球方言ではフシノヤーウティ（星の家移り）という地点があります。これに似た言い方はブラジルにもあります。

Atlas Linguístico de Sergipe (1987 Nelson Rossi他 Universidade Federal da Bahiaカルロッタ シルベイラ フェヘイラ～ネルソン ロッシ セルジッペ文化財団、バイヤ連邦大学) は、セルジッペ州の言語地図だが、この報告書によれば、

星が～ correr (走る) descer (降りる、下へ行く 沈む、おちる) mudar (移動する、うつる) の動詞が使われる。セルジッペ地方の調査地点では「流れ星」には名詞形がなく 星が引っ越している、引っ越しをしている星、星が引っ越しをするときに長い尻尾ができる、単に引っ越しを

する、という回答が載っています。また、引っ越しをして海に落ちるとい
う答えもあります。これがさらに、落ちた星がヒトデになるという民間語
源解釈でもあればロマンチックでいいのですが。

おもしろいのは、この語形や発想に対して二つの地点で評価が全く反対
であることです。個人的な話で恐縮ですが、琉球方言の例を教えてくれた
のは、私の東京都立大学大学院の時の先生で 一昨年亡くなった中本正智
先生ですが、中本先生はご自分の話す琉球方言の中で美しい単語の一つと
して 教えて戴きました。当時、大学院生で研究者として駆け出しだった
私は、その話に感心して いつか自分も是非琉球方言の調査にいつてみた
いものだと思ったものです。

ところが、このセルジッペ地方の報告では、星の引っ越しという言い方
については全く評価されていないのです。星の引っ越し 星が走るという
回答に対して、最も馬鹿な奴の言い方としてという注記があるくらいです

一方、ミナスジェライス州の言語地図では「牝馬の尻尾rabo de galo」と
いう報告が、ミナスジェライス州の中部から西部にかけて分布しています
パライバ連邦大学による1984年の『パライバ言語地図』によれば、ハ
ライバ地方では、「虹」のことを「牛の目（オーリョ デ ボイ）」とい
う語形で表すという報告がありますさらに「牛の肛門（クー デ ボ
イ）」の語例が一例だけですが、併用形としてあります。このような発想
法は、私の持っている意味の物差しでは測ることができません。

琉球方言では虹のことを、蛇とか天の大きなウナギとかいう語で表現し
ている例はあるのですが、どうしてこのような言い方をするのかについて
の説明はありません。

これに似た例で 解釈に苦しむ例として アフリカのある部族のことば
では、若くて美しい女性をほめる言葉に「君はまるで牛の糞のようだ」と
いうのがあるそうです。そのココロは、美しい娘さんには、牛の糞にむら
がる銀バエのようにキラキラする身なりで着飾った若者が群がるという意
味なのだそうです。

6. 3. 語彙体系を構成する形式の量について

語彙の体系の中に多くの語彙を持つ意味分野がある。どの分野に多くの

語彙を持つかは方言によって違う。これは方言を言語に置き換えて考えてみますといいです。同じことが言えそうである。

日本語には、内臓に関する語形が少ないと言われているが、それは京都や東京を中心とする共通語のことを言っているのものであって、方言によっては豊かな語形を持っている方言があります。それは、琉球方言です。南琉球方言では、土地の老人達は実に多くの人体に関する語形を持っています。細かい部分にまで語形があり、一番驚いたのは舌小帯の言い方があることであります。私が担当した人体語彙の調査の中で、あまりにもどの部分にも語形があるのでこちらも意地になって、何とか名前のない部分を探しました。最後に見つけたのは、舌の裏側に付いている筋。これには名前がないだろうと思って聞いたら、ガルガマとすんなりと答えが返ってきたのです。

この語形の語構成はあとで資料の整理をして分かりました。ガルは、手のスジとか筋肉を引っ張っている筋を意味します。ガマは、小さなものにつきます。例えば18人乗りの飛行機はヒコウキガマ、一番年の若いおばさんは、姪や甥からブバガマと呼ばれます。つまりガルガマは、ガルが筋ガマは小さなものに付く愛称を表す指称辞。共通語に直訳しますと「スジちゃん」とでも言うべきものです。

このような語構成についても、方言の独自の発想法というか物の考え方が見つかります。

琉球方言でこのように人体語彙に関して語彙が豊富なことですが、このことは本土方言に対して琉球方言の大きな特徴と言えます。さて どうしてこのようなことがおきているのでしょうか。この方言は小さな島の方言です。島には台湾から来た医者一人だけいます。このお医者さんは、自分の台湾での仕事が定年になって日本の僻地の医療に貢献したいというのでこの島に住むようになったと聞いています。

その島で医者がどんなに大切にされているかといいますと 村長主催の私共の調査団の歓迎会の席で村長の次の席に座るのは、そのお医者さんなのです。村長がどんなに村の発展のために尽くしても、島から医者が居なくなるような事態になったら、政治生命はお終いだと村役場の若い職員が

教えてくれました。

話が横道にそれましたが、このような生活の中では人間が生まれたり死んだりするときの世話は村の物知りの年寄りの役割です。彼らがこれまでの経験と知識で世話をすることになります。このように日常の生活の中で人間の生きる死ぬということが身近にあるため、人体に関する語形が豊富にあるのかもしれませんが。もちろん、この村の話し手の説明では、村ではみんなで豚を解体するので、豚の内臓と人間の内臓が似ているので、内臓について詳しいのだということでした。また、死んだ人を葬るのも、本土方言の習慣とは違い洗骨葬であることも、人体語彙に詳しいという原因の一つかもしれません。

洗骨葬というのは、死者は仮に埋葬されますが、短いときで3年、それ以後に掘り起こして骨をきれいに洗い、瓶に納めるという習慣です。その時に骨を納める順序は足のつま先から順番に積み上げ最後に頭の骨を一番上に乗せるということが決まっているそうです。このことから骨についての語形と知識が伝えられることになるのかもしれませんが。

このあたりの方言では、頭を表す語形の他に頭蓋骨を表す語形を方言形のある方言が多いようです。カナマル（頭）とカナマルゲー（頭の殻）。また、骨の髄について俚言形を持っていることが多く、その語形は多くは脳味噌と同じ言い方をすることが多いです。ズナツバ（頭油という語構成）といいます。

6 4. 語の意味を表す用例について

東北方言のなかの秋田方言を調査していてジュップガシル語を見つけたことがあります。東北方言と言えば、アズマス アジマシという有名な形容詞がありますが、この単語はそれ程有名な俚諺ではないようでした。この意味がまた変わっているのです。形容詞や動詞の用言の意味を調査するときには必ず用例をしめす文で聞くことにしています。

私共が、方言調査をしていて用言の意味を記述するに気を遣うのは、正しい文脈で使えるかどうかということです。的確な例文が得られれば、その方言の語彙体系の中でその用言が意味の体系のどの部分に位置しているか、また共通語とどの部分が違うかが明らかになります。

6 5 ホルトガル語と日本語の例

日本語のほうが語形がたくさんある例としては、次のような例があります。

(1) arrozと米

イネ コメ メシ ゴハン ライス シャリ

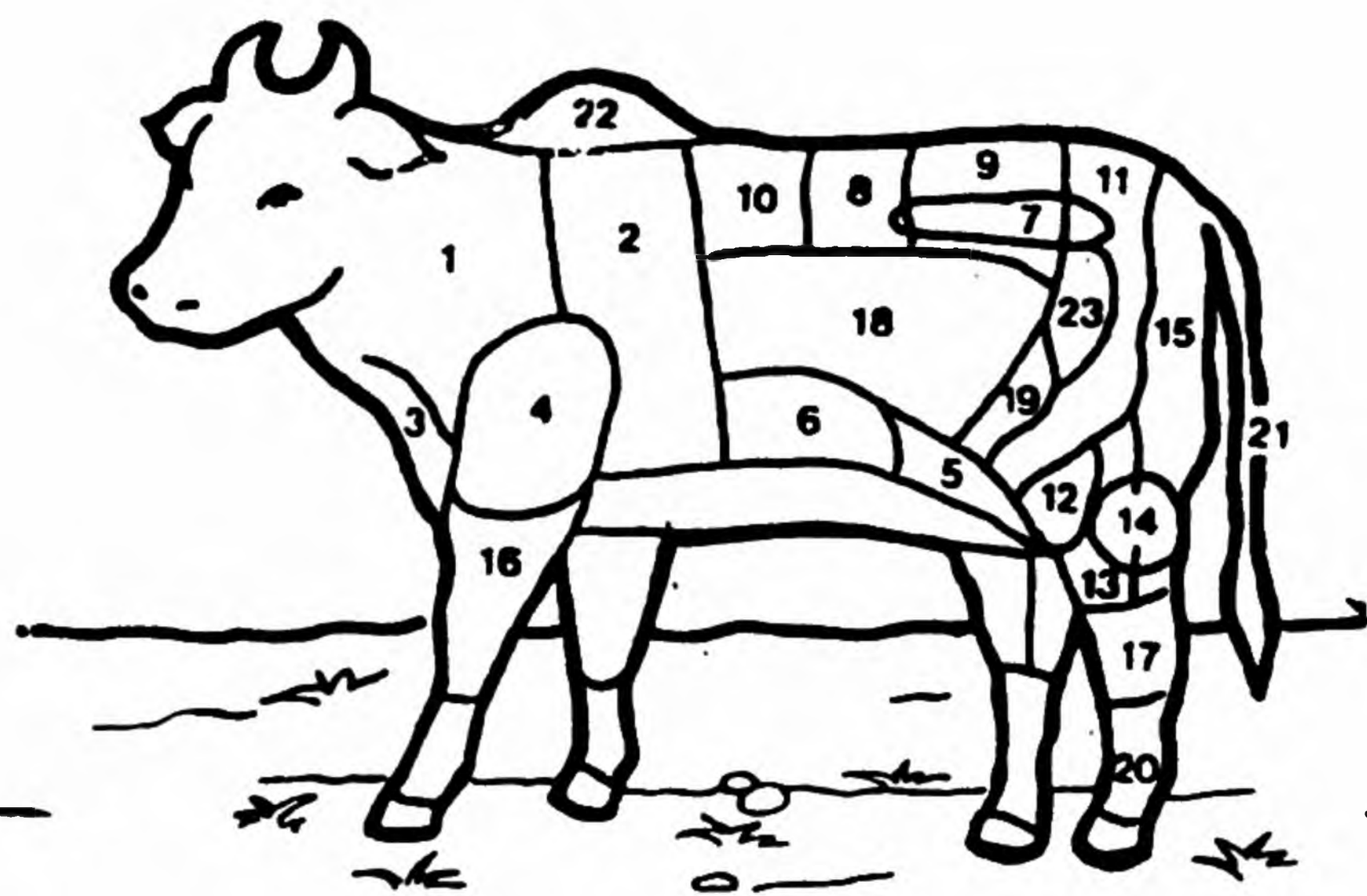
ポルトガル語の方が語形がたくさんある例としては、次のような例があります。

(2) 牛の肉の名前

日本語では、名称が少ないのが特徴です。名称とその用法の差だけでなく、フィレの意味記述に日本語との違いを書いて欲しいと思います。例えば、ポルトガル語のフィレは、牛にも豚にも魚にも鶏肉にも言えます。

<図参照>

牛肉の部位名と用途



—— が日本語で用いる語

1. PESCOÇO (ペスコço=頸) スープ用
2. ACÉM (アセム=肩・ヒレ肉) 煮込み, シチュー, ひき肉用。
3. PEITO (ペイト=胸部) スープ用
4. BRAÇO (ブラço=膊) 煮込み, ひき肉用
5. FRALDINHA (フラジニャ=腹部後方) 煮込み用
6. PONTA DE AGULHA (ポント・デ・アグーリャ=わき腹) スープ用
7. FILE MIGNON (フィレ・ミニョン=ロース, 最上肉) ビフテキ用
8. FILE DA COSTA (フィレ・ダ・コスタ=背部) 煮込み用
9. CONTRA FILE (コントラ・フィレ=準最上肉, 上肉) ビフテキ, 焼肉用
10. CAPA DE FILE (カッパ・デ・フィレ=背部) シチュー用
11. ALCATRA (アルカトラ=腿肉) ビーフ, 焼肉用
12. PATINHO (パチンニョ=家鴨のひなの意味) ビフテキ
13. COXÃO DURO (コシオン・ドウロ=股の硬肉) ビフテキ, 焼肉用
14. COXÃO MOLE (コシオン・モーレ=股の柔らかい肉) ビフテキ, 煮込み, ひき肉用
15. LAGARTO (ラガルト=とかげの意味) 煮込み, ひき肉用
16. MUSCULO DIANTEIRO (ムスクロ・ヂアンテイロ=前脚の肉) スープ, シチュー用
17. MUSCULO TRASEIRO (ムスクロ・トラゼイロ=後脚の肉) スープ, シチュー用
18. CAPA DE FILE (カッパ・デ・フィレ=横腹) ビーフ, 煮込み用
19. MAMINHA DE ALCATRA (マミンニャ・デ・アルカトラ=下腿部) ビフテキ, 焼肉用
20. MOCOTO (モコト=脚) ゼラチン用
21. RABADA (ラバーダ=尾) 煮込み, シチュー用
22. CUPIM (クピム=背のこぶ) 焼肉用
23. PICANHA (ピカンニャ=腿肉の中の脂のついた肉) ビフテキ, 焼肉用

7 まとめ

今後の研究の対象としては、語構成 談話分析 話の進め方、意味記述などが考えられますが、いづれにしろ自分の環境を生かした研究が必要でしょう。例えば日系人の日本語の特色だけでなく、日系人のポルトガル語の特色などははいでしょうか。nao eを短くしてネという言い方がありますが、日本語の「ネ」に似た用法もあるので、他のブラジル人よりは「ネ」を多用する傾向はないのでしょうか。しかし、今のところ、手元に具体的な資料がないのでなんともいえませんが、しかし、生活の様相が言葉の上に反映していることは確かでしょう。

ジャンジャック オリガス先生は、永井荷風は何の変哲もない東京の風景から、荷風独自の美の世界を見いだしたというお話をなさいましたが、私この研究からは、日本人がもっている共通の物の見方を見つけて記述したいのです。そしてお互いの文化について知るためにこのような項目の分析は有効な手段であると思われれます。類義語や語彙体系の分析をし、これらの研究を集大成した和葡 葡和辞典が是非必要だと思えます。

意味の記述の対照研究について、ここブラジルではたいへんおもしろい研究材料を提供していると思えます。ここには、ブラジルポルトガル語を母語とし、日本語に堪能な研究者がたくさんおられます。対照研究に必要な条件は揃っています。このブラジルの地の利を生かした対照研究が、とりもなおさず、ブラジルと日本の文化の理解を深める有効な手段であり、この講演会のテーマである日本文化の諸相に迫ることができる一つの方法でもあること。はからずも、今この講演会の初日に田中総領事から、ブラジルと日本の相互理解のために地道な努力が必要であるというお話を伺い、意を強くしました。

このような意味の違いに記述の主力をおくという観点からの葡和 和葡辞典ができることを願っています。このような期待を申し上げてこの話の結びにします。

6 参考文献

- 1989 西江雅之 『ことばを追って』 大修館
- 1984 青木晴夫 『滅び行くことばを追って—インディアン文化への挽歌—』
国語学会 国立国語研究所編 『フロッピー版日本語研究文献目録. 雑誌編』
- 1992 論説資料保存会 『フロッピー版国語学 日本語学論説資料索引』
国立国語研究所 『国語年鑑』 秀英出版
- 『日本語百科大事典』 大修館
- 1994 『論文 レポートの書き方』 日本語学13-6 明治書院
- 1995 柴田武 『日本語はおもしろい』 岩波新書
- 1972 鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波新書
- 1970 国広哲弥 『意味の諸相』 三省堂